国際社会学部

久米 順子

Junko Kume
地域社会研究コース／イベリア地域
美術史学

中世イベリア半島の美術の魅力

専門は中世イベリア美術史です。中世のイベリア半島では、キリスト教、イスラーム、ユダヤ教の三つの一神教を奉じる人々が、ときには戦い、ときには協働して暮らしていました。そこで作られた美術や建築には、これら三宗教に根差した視覚文化の伝統や技術が、複雑に絡み合った形で展開しています。そうして作られた、一見「ヨーロッパらしさ」を欠くキリスト教美術は、近世以降のスペイン美術のなかにも残存し、スペイン帝国の拡大とともに新大陸やアジアに、その一部が伝わっていくことになりました。

研究紹介

- 「三宗教の王」を自称した13世紀のカスティーリャ王アルフォンソ10世賢王の対異教徒政策と、彼の時代の異教徒表象
- 中世イベリア半島の装飾写本
- 中世の図像や技法の、後世への継承
- 中世の美術やモニュメントの、近現代社会における、保全・修復・活用
- スペイン語圏美術全般の日本への紹介に関わる活動（執筆・翻訳・通訳・イベント企画や運営など）

担当授業

- ■ スペイン語講読
- ■ 美術・建築からみるイベリア史
- ■ ヨーロッパ中世美術と近現代の社会・美術
- ■ 近現代の西洋／スペイン美術史
- ■ イベリア文化地域社会研究
- ■ イベリア文化地域社会卒論演習

関連する分野

- ■ 建築史
- ■ 文化史
- ■ 歴史学
- ■ キリスト教史（宗教史）
- ■ 文化遺産学

出版物

- ■『スペイン美術史入門—積層する美と歴史の物語』
- ■『11世紀イベリア半島の装飾写本』
- ■『帝国スペイン　交通する美術』
- ■『バルセロナ—カタルーニャ文化の再生と展開』
- ■ *Medieval Europe in Motion: la circulación de manuscritos iluminados en la Península Ibérica*
- ■ *Beyond the Seas: A Medievalists Meeting in Tokyo*

国際社会学部

イベリア文化地域社会研究ゼミ

スペインのバル

どのようなゼミか

このゼミの扉は、美術、建築、音楽、宗教、歴史などを切り口として、イベリア世界、西欧世界、中南米を含むスペイン語圏の文化・地域・社会について、あるいは日本の文化・地域・社会について、理解を深めたいと思っている人に広く開かれています。専攻語は問いません。自分の関心のある領域を主体的に探求すると同時に、他のゼミ生の発表内容にも興味を抱いて積極的に質問・議論に参加できることが唯一の参加条件です。

ゼミでは、まずリサーチの仕方、文献の探し方、プレゼンテーションの基本などを学びます。その後は受講者による発表が中心となります。担当教員はいつでもテーマや調査、研究上の相談に応じますし、必要な援助も行いますが、受講者自身が自分の興味を発展させようとする継続的な努力が不可欠です。

ゼミ発表を積み重ねる中で、自分の関心を磨いていきます。そして最終年度に取り組む卒業論文では、右の題目一覧に見られるように、学部での学びの集大成として、各自がおもいおもいの地域・時代・テーマを追求していきます。

卒論

- 「コンキスタドールか、聖人か―フニペロ・セラとカリフォルニア・ミッション―」
- 「ピエール・ボナール作品の女性　―装飾性、アンティミテ、交わらない視線―」
- 「2000 年代以降におけるバルセロナ、
- ラバル地区の公共文化施設の社会的機能　文化芸術が社会に根付くための取り組み」
- 「浮世絵の受容史に関する考察　―絵師と権力者の関係に注目して―」
- 「日本ワインの文化醸成に関する一考察」
- 「字幕における言語文化的情報の翻訳―イタリア映画“Scusate se esisto!”の日本語字幕を分析する―」
- 「男性中心主義的芸術界へのジョージア・オキーフの挑戦－作品モティーフ変遷の観点から―」
- 「後期ロマン派の西洋クラシック音楽における「スペイン的要素」の抽出に関する一考察」
- 「民主政移行後のスペインにおける映画を通じた「歴史的記憶」の回復―子どもの視点から見たスペイン内戦―」

（地域社会研究コース　久米順子ゼミ）

久米ゼミでは、最初は自由に選ぶ好きな題材について、そして徐々に卒論の執筆に向けて、担当回に行うプレゼンを通し、自分の興味関心とそれに対する理解を深めていきます。先生はご専門であるイベリア半島の中世美術史に留まらず、西洋美術史全般や建築・文化・音楽などと社会的な影響に造詣が深く、掘り下げや説明の甘かった箇所への質問や、魅力的で説得力のある切り口の補足、論理展開のバランス修正にも非常に助けになってくださいます。学生は美術・文化に関心が強い者が多く集まるものの、蓋を開けてみれば専攻言語・地域も様々で、興味関心も多岐に渡るからこそ、交流を通して思わぬ発想が生まれたり、新しい分野に触れたりできるのも魅力のひとつです。発表も卒論執筆もテーマに関する自由度が高く個人の裁量によるところは大きいですが、それに対する先生・学生からの反応は自分で向き合うだけでは得られない着眼点や膨らませ方をもたらしてくれます。（桜井七海）